

# ナショナル化に呑み込まれるエスニシティ： クメール人とは誰か？

村嶋英治<sup>†</sup>

## The Impact of Nationalization on Ethnicity: Who are the Khmer?

Eiji Murashima

This article attempts (1) to shed light on the actual condition of Khmernization of ethnic minorities, ethnic Chinese and ethnic Lao in Cambodia; (2) to compare this situation with the Thaification of ethnic Khmer in Northeast Thailand; and (3) to examine the nationalization which has been making rapid inroads among the ethnic minorities of Cambodia and Thailand.

In this article, “nationalization” refers not only to the intensification of ethnic minorities’ identity within nation-states, but also to the promotion of the assimilation of ethnic minorities into a dominant or central language and culture, either voluntarily or by force. Needless to say, the phenomenon of unification of languages and cultures is not limited to ethnic minorities. Currently in many countries in Southeast Asia, there is a powerful trend for central authority to dominate local regions, and as a result cultural differences are gradually disappearing. In other words, central languages and cultures are taking over local dialects and unique minority cultures. People tend to focus primarily on “globalization” in Southeast Asia nowadays; however, a more powerful trend is the unification phenomenon often referred to as “centralization” or “nationalization” (or “Bangkoknization” or “Phnom Phenization”). In this article “nationalization” refers to such centralization.

Noteworthy points in this article are as follows: first, this study uses new materials which were collected during a brief study tour to investigate the current status of the ethnic minorities who are subject to the big waves of nationalization. Second, the ethnic minorities which were the subject of the research, were not minimal, landless ethnic minorities, but main ethnic, territory-owning groups in the Southeast Asian mainland: ethnic Lao and ethnic Khmer. Some of them were forcibly separated by the demarcation of borders, and were forced to live as members of a neighboring country dominated by a different ethnic group. This article attempts to clarify how those people, who became ethnic minorities in neighboring countries, have been experiencing the process of nationalization during the past half century, either by compulsion or of their own free will. Third, cases from several countries in the mainland of Southeast are compared. Fourth, unique and complex situations, such as that of the Lao surrounded by the Khmer in Cambodia and the Khmer surrounded by Thainized Lao in Thailand, are compared, and they are also compared with the assimilation of ethnic Chinese, who play significant roles in both countries.

This article begins by focusing on the actual condition of ethnic Chinese in Cambodia, a group who have an important and distinct position in both Cambodia and Thailand. It can be said that the degree and form of their nationalization is more advanced than that of ethnic Lao in Cambodia and

---

<sup>†</sup> 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 murashim@waseda.jp

ethnic Khmer in Thailand. While ethnic Chinese were originally immigrants, ethnic Lao in Cambodia and ethnic Khmer in Thailand are natives of the regions where they now live. However, in the process of assimilation, in both cases examined here, the severe racial confrontation among races that could be seen in other regions, did not take place. The Lao's Khmernization and the Khmer's Thaification unfolded spontaneously and peacefully, in particular in the later stages, just like ethnic Chinese's Khmernization or Thaification. Thus this smooth transition could be seen as a characteristic of the nationalization of ethnic minorities in mainland Southeast Asia.

The second paragraph focuses on the Khmernization of ethnic Lao in Stung Treng, Cambodia. The third paragraph deals with the Thaification of ethnic Khmer in Surin, northeast Thailand. In the fourth paragraph, the Cambodians' perception of Thailand and Viet Nam are discussed.

The ethnic Lao in Cambodia and the ethnic Khmer in northeast Thailand have been involved in powerful surges of nationalization, and, rather than resisting it, they take on their Khmernization or Thaification spontaneously. This is the same process experienced by ethnic Chinese in an earlier time. That is to say, original ethnic minorities in both countries spontaneously abandoned their own language to be nationalized in the same way as the ethnic Chinese. In the second half of the 20<sup>th</sup> century, nationalization has been swallowing the languages and cultures of ethnic minorities, and ethnic diversity is indeed on the verge of extinction.

## はじめに

筆者は、これまでタイの国民統合をテーマとした論文を何本か物したことがある<sup>1</sup>。それらで用いた資料は、主に中央の政策決定者側の資料であった。統合の対象とされた少数民族側において、統合政策の過程で何が生じたかについては、調査したいという希望は有していたものの、調査に赴くまでには至らなかった。

ところが、2003年8月にカンボジアを訪問<sup>2</sup>し、カンボジアの仏教をタイの仏教と比較する機会を得た。同じ上座部仏教とはいえ、細部には様々な違いが存在することに興味をそそられた<sup>3</sup>。さらに、ストゥントレンに、カンボジアにおける少数民族、エスニック・ラーオを訪ね、彼らの言語や文化が急速にクメール化しつつある現状を見聞した。この見聞から、東北タイに住むクメール人たちの文化は果たしてカンボジアのそれと同一なのだろうか、また、彼らのタイ化の実態・程度は如何ということに、強い興味が生じたのである。このような関心をもって、同年8月末に短期間ながら、東北タイ（イサーン）のスリン県にエスニック・クメールを訪ねた。そこでは、クメールのタイ化を目撃した。

さらに2003年12月には、再度カンボジアを訪問することができた。2回目のカンボジア訪問は、早稲田大学アジア太平洋研究科入学を志望しているカンボジア人青年男女10名に二日がかりの面接をするためであった。面接および大学・役所訪問で、タイ社会のタイ化した華人と同様に、カンボジア社会でもクメール化した華人がエリート・中間層として大きな比重を占めていること、また、彼らがタイ・ベトナムに対して強い敵愾心を有することについて具体的な知識を得ることができた。

本稿は、以上の調査見聞を主な資料として、①カンボジアにおける少数民族である中国系やラーオ系の住民のクメール化の実態を明らかにし、②これを、カンボジアにおけるとは正反対にタイでは少数民族の立場にある、東北タイのクメール人のタイ化と比較し、③これらによって東南アジア大陸部で急速に進行しているナショナル化を明らかにしようと試みるものである。

本稿にいうナショナル化とは、少数民族の国民国家に対する所属意識一体化意識が強化されることのみならず、彼らが中央の、あるいは支配的な言語や文化に強制的・自発的に同化を進めることをも指している。もちろん、言語・文化面の単一化は、少数民族に限った現象ではない。現在、東南アジア大陸部各国では、中央から発する強大な潮流に、地方は呑み込まれ、文化的差異は次第に失われつつある。地方の方言や独自の習慣伝統は、中央の言葉や文化に取って代われつつある<sup>4</sup>。東南アジアでは「グローバル化」だけに注目が集まる傾向があるが、それ以上に強力な潮流は「中央化」、「全国化」（あるいは「バンコク化」、「プノンペン化」）と称すべき単一化現象であろう。本稿にいうナショナル化は、このような中央化、全国化と軌を一にし、重なり合っている。

本稿にいくらか新しさがあるとすれば、次のような点を挙げることができよう。一つは、ナショナル化の大波を受けつつある、少数民族側の実態を短期間ながら足で歩いて調査して収集した新たな資料を用いていること。二つは、対象とした民族が、少数民族とはいっても、どこにも自らの国をもたない本来の少数民族ではなく、東南アジア大陸部の主要民族であり、自らの国家を有するエスニック・ラーオとエスニック・クメールであることである。彼らの一部は、自らの与り知らぬ国境画定で分離され、異なる民族が大部分を占める隣国の国民として生きることを強制された。本稿は、隣国の少数者となった彼らが、過去半世紀においてどのように強制的、自発的なナショナル化の道をたどったかを明らかにしようとしている。三つ目としては、東南アジア大陸部に位置する複数の国における事例を比較していること、四つ目としては、カンボジアでは、クメールに囲まれたラーオ、タイでは逆に、タイ国民であるというアイデンティティを内面化したラーオ人（イサーン人）に囲まれたクメールを取り上げるという、取り合わせの妙のみならず、彼らを両国で共通に重要な役割を有する華人の同化と対比していることである。

本稿は、第1節において、まず、カンボジア、タイ両社会で重要かつ特異な地位を占めているエスニックグループ、華人の実態を、カンボジアに関して見てみたい<sup>5</sup>。彼らのナショナル化の程度・形態は、カンボジアのラーオ、タイのクメール、両者のナショナル化を先取りしたものということができる。華僑は外来の移民者であり、一方、カンボジアのラーオやタイのクメールは本来の原住民である。しかし、前者の同化過程と同様に、後者の同化過程でも、他の地域に見るような民族間の激しい対立は生じなかった。後者は、言語文化を共にする集団が構成する隣接の国家との自己同一化に強い執着を示さなかった。ラーオのクメール化やクメールのタイ化は、とりわけその後期においては、華僑のクメール化あるいはタイ化と同様に自発的平和的に進行した。これは東南アジア大陸部における少数民族のナショナル化の特徴として指摘することが可能であろう。続いて、第2節では、ストゥントレンのエスニック・ラーオのクメール化を、第3節では、スリンのエスニック・クメールのタイ化を扱う。第4節は、カンボジア人の対タイ、ベトナム認識および両国に住むエスニック・クメールに対する認識について述べたい。ここからは、カンボジアに見られる、強力なナショナル化志向の背景・源泉を窺うことができる。

## 1. カンボジアにおける濃厚な華僑の血統と同化の現状

2003年12月の早大留学希望者への上述の面接は、10名（男性8名、女性2名）の対象者を二日に分けて実施した。面接対象者の生年は、1972、73、74、76、79、80、82年である。1980年生が4名いるが、それ以外の年は1名ずつである。

衝撃的なのは、10名の面接対象者のうち、父親をクメール・ルージュ（ポルポト派）に殺された人が5名にも上ることである。なかでも1972年から76年の間に生まれた人は、4名全員が父親を殺されている。（最後に父親を殺された人は、80年生）。殺害された父親たちの職業は、官営工場のマネージャー、高校の数学教師、医師、フランス留学経験のある国家公務員などである。一方、母親を殺されたという人はいなかった。これは、カンボジア社会では隣国タイと比しても、女性が社会的に進出していなかったことと関連があるであろう。今回の面接でも、母親は主婦（housewife）という答えが多かった。一方、生存している5名の父親の職業は、プノンペンの国家公務員（2名）に、カンダル省の建設資材商人、カンダル省の農民、コンボンチャム省の教員が各1名である。

面接対象者の10名は、全員が大卒である。出身大学は、王立プノンペン大学（Royal University of Phnom Penh）卒業者が7名。この内、心理学科卒業者1名を除く6名は外国語学部（Institute of Foreign Languages）英語科卒である。他に王立芸術大学卒1名、国立経営大学卒1名、英語教育に力を入れている私立ノートン大学卒が1名である。彼らの現職は、国立大学講師2名（王立プノンペン大学、王立法経大学各1名）、国家公務員3名、国際NGO職員2名、民間新聞社勤務（英文翻訳担当）1名、外資系保険会社1名、学生1名である。

1人の国家公務員を除いた8名の有職者の平均月収は、350米ドルである。国際NGOの職員2名は月給だけで、400～500ドルを得ている。それ以外の者は主収入源を、本職からではなく、本職以外の収入に依存している者が多い。たとえば、2名の大学講師、1名の上院に勤務する国家公務員、それに民間新聞社勤務者の計4名は、英語の特別授業を担当してアルバイト収入を得ている。例えばこのうちの一人の大学講師の月給は30ドルだが、別に私費学生コースを教えて月250ドルの所得を得ている。上院に勤務する公務員は、120ドルの月給の他に、王立法経大学の夜間コースで英語を教えて200ドルの収入を得ている。民間新聞社勤務者の月給は150ドルであるが、夜学で英語を教えて同額の副収入を得ている。

面接対象者10名全員に、中国人の血が入っていた。タイ人の多くに、中国人の血が入っていることは十分承知していたが、隣国カンボジアでも、事情は同じらしい。

面接した10名全員が父方（7人）もしくは母方（2人）に、あるいは双方（1人）に中国人の血が入っている。中国移民の3代目という者が多い。先祖の出身地は潮州が2名、福建が2名。他の6名は、先祖の出身地を知らない。中国語を学んだことがある者は、2名。この他に、少し中国語ができる者が、1名いるだけである。しかし、彼らのうち少なくとも7名は、清明節などの中国の習慣を維持している。カンボジアの中国系の人々は、タイの中国系住民以上に中国文化を維持しているかもしれない。

面接した10人に限らず、今回訪問した大学や官庁で会った人の多くは、一見中国系であった。王立プノンペン大学学長 Pit Chamnan 氏は、筆者が2003年8月にインタビューしたポルポト体制ナン

バー・ツのヌオン・チア (Nuon Chea) 氏<sup>6</sup>そっくりで、色白の中国系顔。教育青年スポーツ省次官の 1 人（連立与党の主要メンバーである二党が、それぞれ次官を出している。彼は人民党出身の次官）Im Sethy 氏の顔も、タイのチュラーロンコーン大学の某元政治学部長とうり二つの中国顔。王立法経大学 (Royal University of Laws and Economics) の学長 Yuok Ngoy 氏（1980 年代に 87 年まで同校で実施された、ベトナム人教員によるベトナム語授業で、計画経済を学んだ）も中国顔。同大学で教えている四本健二・名古屋経済大学助教授によれば、同校の 6000 人の学生の殆どには中国人の血が入っているとのことであった。カンボジア事情の専門家である某外交官によれば、カンボジアの華人の 7 割は潮州系であるが、ポルポト時代に都市の潮州系華人を地方に追いやったために、華人と地方クメール人の結婚が生じ、クメール人と中国人との混血化は一層進んだ由である。

以上から見て、ヌオン・チアがカンボジア指導者として、中国系 3 世（劉姓、バタンバン出身）であることは例外ではなく、むしろ普通のことであることが判る。地方に住むカンボジア華人には農業従事者も少なくないようである。面接をした一青年の両親は中国系で、カンダルで農業を営んでいた。ヌオン・チアの親も、バタンバン郊外で商売を営みながら農耕もしていたという。ポルポト体制の特異性は、中国系住民をも大量に殺害したことである。父親を殺された面接者の 1 人は、ポルポト派は中国の援助を受けながらも、中国系住民を殺害したと語っていた。しかも、中国系かどうかを判定する根拠は、ただ顔の色や形が中国人に近いかどうかという、極めて杜撰なものであったようだ。

10 名の面接対象者の中には、中国の姓をそのままファミリーネームとして用いている者 (Heng や Cheang など) もいれば、中国語の名前をカンボジア名としている者もいた。カンボジアの現外務大臣 Hor Namhong の姓名は、中国名をそのまま使用したものとのことであるし、また、Royal University of Fine Arts の考古学教授 Dr. Ang Choulean も同様である由である。タイではタイ籍を取得した場合はタイ風に姓名に変えることが求められるが、カンボジアでは、その必要はないのである<sup>7</sup>。これは、カンボジア人の氏名自体が、姓が先、名が後で中国人と同じ順序のうえ、単音節で中国語と似ているためであろうか。たとえば、Cheang Sok Kea という姓名の場合、彼のファミリーネームの Cheang は中国の姓をそのまま使用し、ミドルネームの Sok はクメール語、名前の Kea は中国語である。カンボジアでは通常の呼称には、最後の名前の部分のみを用いる。同じ単音節で中国語かクメール語かは見分けが困難に見えるが、カンボジア人には、すぐに判別できるとのことである。面接から判ったことは、カンボジア人の姓の多くは、祖父の名前に由来していることである。祖父の名が姓になったのであるから、ある単語は名としても姓としても用いることができる。例えば、「国家」を意味する Ratha もしくは Rath という語は、名としても姓としても用いられている。

カンボジアはインドネシアにおける 1998 年 5 月の反華僑暴動時に、インドネシアを脱出した華僑多数を受け入れた国として知られる。現在でも、同国は中国人が移民として入国する場合に、最も障壁の少ない国のようなのである。バンコクでタイ航空に勤務している友人（中国系二世、中国語可）の話によると、中国からビザなしでバンコクまで飛んできた中国人に、中国に帰国するか、到着地でビザを取得できるカンボジアに行くかを質問すると、多くはカンボジア行きを選択するそうである。このように新中国人の流入が多いためか、プノンペンの中国系書店の中国語図書は、バンコクのそれよりも充実してい

る。

プノンペン以外の地方でも、中国系人口は少なくない。バットンバンやクラチエなどの地方都市を2003年8月に訪問した時、中国人学校が目についた。バットンバン省における仏教教育の最高学府(中等レベル)が置かれ、かつ、同省のモハーニカーイ派の全僧侶を統括する省僧長(Mekhun)が住む Pov-eal 寺、すなわち、同省の上座部仏教の中心寺においても、漢字が記された中国人の墓、廟、建物が多数見られた。同じく8月に、ストゥントレン省庁所在近くのスラ・ルセイ村(Khum Srah Russiy)の村長(MeKhum, 英語では Commune Head, タイのガムナンに相当) Pan La (61歳)氏に、同村の人口構成を尋ねたところ、同村の全人口は3963人(723世帯)で、その中、カンボジア国籍の華人は128人(22世帯)、同じくカンボジア国籍のベトナム人は32名(6世帯)、残りはクメール人が3803人(695世帯)という答えが返ってきた<sup>8</sup>。プノンペンを早朝、車で発って北に車行1時間余のコンボンチャムで、午前7時過ぎに一日一便のストゥントレン行き快速船に乗り換え、メコン河を遡航すること8時間でストゥントレンに到着する。ラオス国境の僻地に位置する同省の全人口は、12万人に過ぎないが、このような所にも、中国系の人々が少なからず生活していることが判った。

## 2. カンボジアのラーオ人のクメール化

ところで、上述の人口統計については、もう一つ注意を要することがある。クメール人3803名と称しているが、その多くは、エスニックにはラーオ人(クメール語でリャオ)なのである。Pan La 村長自身もラーオ人であるが、カンボジアの統計では、エスニック・ラーオはクメール人として分類されるようである。ストゥントレン(Stung Treng はクメール語で、Stung は川、Treng は芦に似た植物の由である。同地のラーオ語の地名は、Siang Taeng。Siang は、沙弥出家経験のある男性への敬称、Taeng は瓜の由)の住民は元来ラーオ人で、クメール人が多数移動してきたのは、1979年以降とのことである。新参のクメール人はお役人とその家族(役人の妻の多くは、市場で小商いをしている)か、コンボンチャムなど河下の人口の多い地域から来た小商人や失業者である<sup>9</sup>。それ故、同省のモハーニカーイ派<sup>10</sup> 省僧長(Mekhun)、Nou Thorngnak 和尚の住むスラケーオ・ムニーワン(Sraskev Mounywann)寺(同寺には1897年建造のサーラー棟が現存)には、45名の僧侶・沙弥(大部分は若い沙弥)がいるが、プノンペンからクメール語の教師として招いた一名の青年僧 Maha Ma Lam Thon (26歳、バットンバン出身、在タイ歴3年)を除けば、全てラーオ人であることは納得できる。色白の85歳の省僧長は、東北タイの著名な「森の僧」(プラ・パー)である故テート師の風貌そのものである。Maha Ma Lam Thon は、この寺の中では全てラーオ語が使われているので、何の話をしているのか理解できず、困るとこぼしていた。

しかし、ストゥントレンにおいてもラーオの言語・文化・伝統は今やクメール化の流れの前に風前の灯である。ラーオ文化維持の中心となるはずのスラケーオ・ムニーワン寺においても、タム文字(ラオス、北タイで仏典を記すために用いた文字)の貝葉を読むことができる僧は、もはや老僧2人しか残っていない<sup>11</sup>。しかも、古いラオス文字で印刷された仏典やタム文字の貝葉も、ポルポト時代に破壊され、僅かしか遺されていない。

ストゥントレン省では、仏教寺院でのラーオ語教育が禁止されてから、すでに50年に近い。Pan La 村長によると、この地でも、1956年まではラオスで使用されている教科書と同一のものを扱い、寺院付設の6年制小学校で僧侶(Khu Ba)がラーオ語の読み書きを教えていた。小さなストゥントレンの町にも、当時はラーオ語教育を行う寺院が4寺も存在した。今ではラーオ語よりもクメール語の方が上手だという、1942年生の同村長自身も、小学校6年までラオスと同一の教科書を寺院の学校で学んだ。同村長によると、1953年にカンボジアが独立する前までの、仏領インドシナ時代にストゥントレンで流通していた紙幣には、ベトナム人、クメール人、ラーオ人の姿が描かれており、3者は平等の扱いであり、ラーオ語教育も自由であった。ところがカンボジア独立後、1956年に政府は、寺でのラーオ語教育を厳禁した。そのみならず、町の中でラーオ語を使用しているのが、警察に見つかり25リエルの罰金まで課されたという。それ以降、学校の教授言語はクメール語のみとなった。今日、ラーオ語の読み書きができる人達は、1956年以前に教育を受けた50代後半以上の人だけとなっている。ポルポト時代には、ベトナム語を話すと言われたが、ラーオ語の使用にはそのような危険はなかった。カンボジア政府の外国語制限は、1979年のベトナム軍による解放後、撤廃されたという。現在、中国語学校が各地に開校されているので、ラーオ語学校も復活させることが可能ではないか、と同村長に質問したところ、答えは、中国人には力があるが、ラーオ系住民は政府に圧力をかけるだけの力がないので無理だろうということであった<sup>12</sup>。

ラオスとの交流は途絶えたわけではない。この地域のラーオ語は、河上にある南ラオスのチャンパーサク地方のラーオ語と基本的に同一で、チャンパーサク地方(中心はパクセ)に親族がいる者も多いようである。例えば、Pan La 村長は、叔父がパクセに住んでいるだけでなく、姉二人もポルポト時代にパクセに逃げて、同地に留まったままである。更に村長の妻の兄弟はウィエンチャンと米国にいるとのことである。また、省僧長の秘書役の僧も、チャンパーサクに伯父がおり、相互に往来していると語った。

ストゥントレン近くの本コン河岸にはチークの大木の並木が続いている。その並木に沿って同市内から飛行場方向に、北に上ると、ラーオ人だけの稲作農村が広がっている。農村のラーオ人にとって、学校で学ぶ言葉は、クメール語であっても日常生活はラーオ語である。また、結婚もエスニック・ラーオ間で行っており、クメール人との結婚はない、という。それ故、新しい世代はラーオ語の読み書きはできなくなったとはいえ、話し言葉としてのラーオ語はラーオ農村で今後も継承されるであろう。しかし、一旦農村を出ると、クメール語の世界である。カンボジアでは少数派であるラーオ系住民はクメール人に対して劣等感があるようである。クラチエの食堂で月給15ドルで働きながら近くの中華学校で英語を8カ月前から学び始めたという、ラーオ系住民の少女に遭った。彼女は、ラーオ出身であることが嫌だ、ラーオ語は話したくない、クメール語ができなければプノンペンに働きに行くこともできない、と語った。

### 3. 東北タイのクメール人のタイ化

比較のために、カンボジアのラーオ人と同様にナショナル化に直面している、タイ領のクメール人に

ついて見てみたい。東北タイのスリン、プリラム、シーサケート、ローイエットの4県には、多数のエスニック・クメールがエスニック・ラーオとともに、共住している。なかでも、スリン県におけるクメール系人口割合の大きさは、カンボジアのクメール人にもよく知られている。東北タイのクメール系の人々はクメール・スリンと称されることもある。

2003年8月にカンボジアからバンコクに戻って、スリン県にクメール人を訪ねた。スリンは、表面的にはタイの他の地方都市と何ら変わらない。市中の看板もメディアも全てタイ語である。タイ語で話せば、誰からもタイ語で返事が返ってくる。ここにタイ語と同じくらいに話されている言語がもう一つ存在しているとは思いつかないほどである。ところが、クメール語を話せば、スリンはクメール語の世界に一変するのである。今回の訪問には、筆者のゼミ生であった、カンボジア人留学生ペキニーさんも同行した。スリンの最上ホテル、トーンターリン・ホテルに到着するなり、彼女は誰彼となく話しかけクメール語が通じるかどうかを確かめた。驚いたことには、ホテルのフロント係やその他の従業員全員がクメール語を話すだけでなく、エスニック・クメールであったことである。

ペキニーさんによれば、この地域のクメール語はアンコールワットのあるシェムリアップ辺りのクメール語に近いという。しかし、この地域のクメール人がアンコール時代から連続と住み続けているかというところではないらしい。カンボジア側が自国の領土内にあると一年前から主張し始めたター・ミアン・トム遺跡のあるスリン県パノムドンラック支郡ター・ミアン村の道路の脇に、日本のお地蔵様よろしく、同村を開いた指導者ター・ミアン (Ta Miang) 像が立ち、祠に由来が記されている。タイ語で書かれた由来文によると、クメール人ター・ミアンがカンボジアから村民と共に、この地に移って来て、村を開いたのは1767年であるという。現在はスリン市からター・ミアン村まで快適な舗装道路が通じているが、同村は少し前までは国境の僻地であった。

この村にあるヒマワンバンポット寺の、全身入れ墨をした住職 (39歳) の話<sup>13</sup>では、ター・ミアン村にも、今ではラーオ人が住み着いているが、クメール系とラーオ系との間の通婚は少ないそうである。同寺の10名の出家者 (僧侶9、沙弥1) 全員がエスニック・クメールであり、村の70歳以上の人は、タイ語を話せないという。ペキニーさんは住職を訪問してきたクメール語しか話せないという70歳代半ばの二老人と話して、同胞意識を刺激され感激していた。それでも、住職は、寺での説法は、クメール語よりもタイ語を使う方が多い、という。その理由は、クメールの若い世代は、タイ語がよく理解できるので困らないし、村のラーオ人にも判るように話すには、タイ語の方が便利だからだそうである。この寺で、クメール語だけを用いる行事は年2回だけだという。90日間の雨安居 (パンサー) の丁度半ばの日に行われる、功德を積むために僧に布施する行事 (サート・レック) と雨安居の明ける15日前から行われる未だ転生していない先祖の霊供養のために僧に布施する行事 (サート・ヤイもしくはブン・サート) がそれである。エスニック・クメールであるスリン県のサンガの長 (Chao Khana Changwat, カンボジアの Mekhun に相当)、トーンユ (Thongyu) 和尚 (サーラーローイ寺住職、70歳) の話では、彼の寺でも50年ほど前まではクメール語で説法していた<sup>14</sup>、という。彼の寺はスリン市内にある県内最高格式の寺であるから、クメール語説法が比較的早く消滅したのは理解できる。しかし、元来は、クメール系の住民だけから成っていたカンボジア国境近くの僻地の村、ター・ミアンでもクメール語に



よる説法が消滅の危機に瀕しているのは驚きであった。

スリン地域とシェムリアップとの間には、今日でも交流がある。シェムリアップで会った80歳の省僧長 Puth Ponn 和尚（ゲーサラーラーム寺住職）は、20歳でプノンペンで出家（トアンマユット派）したのち、23歳の時、スリン県プラサート郡のクットトム寺（タマユット派）に2年間留まったことがある。彼によれば、当時はプラサート郡の年配の人はクメール語しかできなかった。彼は村の小学校でクメール語で授業をしたこともある<sup>15</sup>、という。

ポルポト時代以前は、国境は名のみで両国のクメール人は自由に往来していたという話をスリンでも聞いた。しかし、前出ター・ミアン村の国境まで行ってみると、現在でもポルポト時代以前とそれほど変わってはいないことが判る。遙かに天秤棒の如く緩やかにしなった Dong Rak（クメール語では、ドンレーク、天秤棒の意）山地を望む国境の高原には、ケナフやキャッサバの畑が広がっている。この畑で働いているのは、カンボジア側から毎朝越境して働きにくる日雇い労働者である。農業労働者として雇用する場合、タイ人なら一日100バーツ（約280円）以上の日給が必要だが、越境カンボジア人はその半額で済むそうである。また、カンボジア側からパスポートなしで入ってきた僧侶が、タイ側の寺で雨安居することも多らしい。但し、官憲に見つかれば出国を強制されるということだが。

ポルポト時代に越境が困難であったのは、国境には、クメール・ルージュから「国際的」（タイ語でサーコン）支援を得ていたタイ共産党の解放区が存在していたからであろう。

現在では、スリンのカープチョーン郡の Kapcheong Immigration Point からタイ国籍者は20バーツ（約56円）を払えば容易にカンボジア領に入ることができる<sup>16</sup>。同ポイントからカンボジアに入るとすぐ正面にカジノ賭博場がある。同じようなカジノはカンボジア西部のパイリンの国境にもある。後者には立ち寄って見たが、カンボジア人は立ち入り禁止で、ピックアップで越境してきた、裸足にサンダル履き、上はシャツ一枚という出立ちのタイの庶民で賑わっていた。

このようにスリンでは、カンボジア側との間にヒトの移動や交流があり、国境を跨いだ親族もいるが、スリンのエスニック・クメールには、カンボジア国民になりたい、あるいはカンボジアに統合されたいと希望する政治運動は皆無なようである。タイ国籍をもつエスニック・クメール（クメール・スリン）にとってのカンボジアのイメージは、流血の内紛を繰り返して自滅しつつある国、責任ある指導者のいない危険な国、生活水準の劣悪な国というマイナスのものばかりのようである。カンボジア側の指導者も、スリンのクメール系住民にクメール民族意識が希薄なことは認識しているようである。1940年代末に、スリンのクメール・イサラクの活動にも関係したヌオン・チア氏は、筆者に次のように語った。タイ領内に住むクメール系の人々には、クメール民族意識がない。1940-50年代にカンボジアの独立解放運動（クメール・イサラク運動）に協力した在タイ・クメール系の人々も、私益を図る機会として独立運動を利用したに過ぎなかった。ところが、メコン河下流域のベトナムに住むクメール人（Khmer Krom、下クメール人）は、心からクメール人だ<sup>17</sup>、と。

クメール・ルージュが出家者に還俗を強制し、拒否する者は殺害した時代、スリン、ブリラム地区にはかなりのカンボジア僧が逃げ込んで来た。なかでも有名な僧は、現在84歳（1919年、バットンバン生）のルアンプー・タンマランシー（Luang Pu ThammaRangsi）和尚である。彼は1974年当時バッタ

